うつのみや 歴史民俗紀行 第03回

宇都宮二荒山神社の夏越しの祓

栃木県立博物館 人文課長 篠﨑 茂雄

宇都宮二荒山神社では、毎年6月30日と12月31日に大祓を行う。このうち6月の大祓は、夏越しの祓と呼ばれ、「水無月の 夏越しの祓 する人は 千年の命 延ぶというなり」と唱えながら、直径2㍍ほどの茅で作った輪をくぐると、病気や災難から逃れられ、長生きができると伝えられている。くぐり方には流儀があり、八の字を描くように3度、すなわち社殿に向かって茅の輪をくぐったらまず左に回り、また輪をくぐったら今度は右に回り、さらに輪をくぐったら左に回り、4度目の輪をくぐった後に社殿に進んで参拝する。当日参加できない人は、神札所から配られた形代（人形・ヒトガタ）に自分の姓名と年齢を書いて、体の具合の悪いところを撫で、3度息を吹きかけたものを参拝者に託して持って行ってもらう。すると、神社では穢れを遷した形代を祓い清めてくれる。その後、形代は、「形代流し」と称して田川に流した時代もあったが、現在は境内でお焚きあげされる。

茅の輪くぐりの様子（令和元年・宇都宮二荒山神社＝写真提供）

かつて、日本人は一年を2期に分け、前半の始まりは正月、後半は盆（旧暦では7月1日が盆の始まりである）とした。そして、それぞれの最後の日、つまり6月と12月の晦日（最後の日）には禊を行い、身を清めてから新たな時節を迎えた。これが大祓である。宇都宮二荒山神社の夏越しの祓が、いつ、どのように始まったかは定かでないが、日本における大祓の所見は『古事記』に見られ、『延喜式』には、祓草として麻の葉が使われたことや6月晦日に読み上げる祭文が記されている。さらに、文化3（1806）年に刊行された『諸国図会年中行事大成』には、茅の輪をくぐる人々の様子が描かれ、当時の行事の様子がわかる。

茅の輪は、当日の午前中に宇都宮二荒山神社の神官などの手で作られる。イネ科チガヤ属の多年草である茅は、日当たりのよい土手などに群生し、屋根材などにも使用された身近な植物である。そして、強靱な根と青々とした葉は、強い生命力を感じさせ、剣のように先端の尖った葉は、魔を除けるものとして信仰された。茅の輪は、割竹で作った心棒に束ねた茅をくくりつけ、紐で縛って形を整えることで完成する。例年、多くの市民が、神官の先導で茅の輪をくぐり、身についた穢れや厄災を茅に遷して、新たな半年を迎える。

夏越しの祓は、疫病が流行しやすい夏を乗り越え、残りの半年を健康で過ごせることを願う信仰である。また盆を前に穢れを払うという意味もある。今年は、新型コロナウイルスの流行により、肉体的にも精神的にも厳しい状況が続いている。このような災難の一日も早い終息と今後の安寧を願うことは、人々共通の願いであろう。時節柄、夏越しの祓に参加してみてはいかがだろう。

『諸国図会年中行事大成』（臨川書店から復刻されたものを転載）
文化3（1806）年刊行。速水春暁斎の著で全6冊からなる。
正月から6月まで、1冊ごとにその月の神事、祭礼、年中行事などを解説している。